

スダチのかいよう病に関する技術情報

観 17 年 6 月 8 日 徳島県立農林水産総合技術支援センター技術支援部 高度専門技術支援担当

1. 発生状況

観 17 年 5 月 10 日～6 月 8 日に県内主要産地の神山町、佐那河内村、徳島市、阿南市、勝浦町、上勝町などの約 50 園地を調査した。詳細はとりまとめ中。概要のみ。

- (1) 昨年、主に 10 回に及ぶ台風の襲来が影響し、県下全域にかいよう病が多発した。風当たりの強い収穫後の加温ハウスや東面向きの山腹園では被害が大きく、旧葉の落葉や発病枝の枯死が目立つ。ハウス栽培では、加温を中止した園や、加温しても着花が極端に少ない園があり、深刻な状態となっている。また、被害の甚大な園では樹勢低下がみられる。
- (2) 3 月からの少雨と 5 月の干ばつで春葉の発生は少なめであるが、5 月 25 日頃より新葉での発病がみられる。早急な対策が必要である。

2. かいよう病とは

- (1) 病原菌は細菌の 1 種。旧葉、旧枝の病斑から新梢葉等の気孔や傷口から風雨によって感染する。
- (2) 感染してから夏季では 5～10 日、春秋季では 10～20 日程度で発病する。10 月下旬まで発生し、一旦発生すると撲滅が難しい病気。

3. 対策

(1) 耕種的防除

発生源となる発病枝葉・果実の早めの除去を徹底する。(特に台風前の除去)

6 月下旬～9 月のミカンハモグリガの防除の徹底。

秒速 6 m 以上で発病が多くなる。園地の東(南)側を中心に防風垣、防風ネット(網目 5 mm 程度)等を設置して風を遮る。

通常の風では、施設の高さの 8～10 倍の距離まで減風が期待できる。

但し注意点として、昨年、ハウスではサイドのビニール被覆でかなり発生を防げた例があるが、別の例では高いハウスで被覆もかなり高い位置まで残したため、ハウスが台風で傾いた事例もあるので、高さや風当たりの強さに留意する。

長大な棘は硬化してから除去するのが無難。

(2) 薬剤防除例

ハウス栽培(当面の間)

収穫後新梢発生時	銅水和剤(ドイボルドー-A 1000 倍、コサイドボルドー 2000 倍など)+クレフノン 2000 倍
夏剪定後の発芽伸長時	銅水和剤(ドイボルドー-A 1000 倍、コサイドボルドー 2000 倍など)+クレフノン 2000 倍
展葉し 70% 程度硬化時から 9 月末まで	i c ボルドー 66D 50 倍 * 1

* 1 i c ボルドー 66D はかいよう病には 40～200 倍で登録されているので、濃度は葉の硬化度合によって加減する。

露地栽培（3～6月）

3月の発芽前	icボルドー-66D50倍
4月下旬～5月上旬展葉期	銅水和剤（トイボルドー-A1000倍、コサイドボルドー2000倍など）+クレフノン200倍
5月下旬～6月上旬 （葉70%硬化以上）	icボルドー-66D50倍液 *2
梅雨期	ホクコーマイシン水和剤またはアグリマイシン水和剤の各1000倍液 *3

*2 icボルドー-66Dはかいよう病には40～200倍で登録されているので、濃度は葉の硬化度合や果実の成熟肥大によって加減する。

*3 ホクコーマイシン、アグリマイシンは共に「収穫の30日前まで」「2回以内」限定とする。

（3）その他の注意点

5月に乾燥が続いたため、発根への影響が懸念される。特に昨年早くから発病、落葉した園では根への貯蔵養分の蓄積が十分でなく、樹勢が低下している。

敷草や完熟堆肥、客土等で根の保護と発根に努める。

土の乾燥時には灌水に努める。

昨年のかいよう病による落葉で樹勢が弱い園・樹では、生育期間中に、10a当り1回につき窒素で5kg、年間5回程度の分施に努める。

過剰施肥は避ける。